

富裕市民層だけではなく、非市民を中心とした中産層が多かったこと、及びその双方が、貿易商人・貸主の両方として活躍したことが推定されている。

伊藤貞夫「古典期アテナイの鉱山経営者」は、「ポーレライター碑文」の分析によって、前四世紀におけるラウリオン銀山の経営者には、名門貴族と新興富裕者の二つの型が見られるが、後者が主流であったこと、そして鉱山経営によって蓄積された富が経営者の家の興隆の基盤となり、彼らの政治的比重を高めたことを述べている。

桜井万里子「古典期アテナイにおける女性の地位と財産権——Isaios, X 10 の法規を中心に——」において、論者はアテナイにおける女性の地位を財産権の面から取り上げ、古典期においても、家庭内における女性の地位はさほど低くはなく、女性も半ば公然と様々の契約・取引を行っていたが、不動産取引には直接関与しなかった、しかし時代が下るにつれて、次第に女性による不動産の所有や取引も行われるようになってであろうと推測している。

介
次にローマ史関係であるが、毛利晶「ローマ帝政成立期のガリア社会——反ローマの戦いとガリアの民衆——」は、『ガリア

戦記』の丹念な読解に基づいて、カエサル時代の、ローマの支配に対するガリア人社会の対応を考察している。これによると、各部落内部で、親ローマ的な貴族と反ローマ的な民衆の支持を受けた貴族とが対立していたが、前者も、ローマ騎士が進出して彼らの経済的特権を侵害するに及んで、反ローマ闘争に加わったのだという。

坂口明「servus quasi colonus について——奴隸制農場経営衰退の一側面——」において、論者は主としてブリニウスの書翰から、当時のイタリアの農場経営において、家族と私有財産の所有を認められ、分割地を与えられた「小作人的奴隸」による経営が大きな割合を占めていたことを読み取り、これを奴隸制衰退の一つの側面とみなしている。

本村凌二「『クリア』の歴史的性格——帝政期北アフリカ属州史の一断面——」は、北アフリカ諸都市のクリアの起源が、カルタゴ時代の「ヘタイリアイ」にまで遡ることを指摘し、それが帝政初期においては民衆の構成単位として活発な政治活動を行っていたが、やがて民衆の衰退と共に、私的な活動に専念する集団へと変質していったであろうことを推測している。

最後に、松本宣郎「キリスト教大迫害——四世紀初頭のキリスト教徒とローマ帝国——」は、大迫害前夜のキリスト教徒の状況を述べた後に、ディオクレティアヌスによる「大迫害」に綿密な再検討を加え、それが理念においては厳格でありながら、実施面においては穏やかであったことを、具体例に即して論じている。

全体として、とり立てて目を引く新説は見られないが、すべて無理のない結論が導き出されており、枚数も適度である。現在のが国における、古典古代史の研究水準と傾向を知る上において、有意義な論集であろう。

(A 5 判 三八〇頁 一九七七年六月
東京大学出版会 三六〇〇円)
(大西陸子 京都大学大学院生)

James M. Powell ed.
*Medieval Studies:
An Introduction*

我が国においては一般に歴史学の入門書、あるいは大学における「史学研究法」「史学概論」などの講義も、ドイツ・アカデミ

ズム史学の枠組に基づいているといえよう。ここに紹介するパウエル編『中世研究—入門—』は、それらとはやや異なったアメリカン・スタイルともいうべき形式・内容の入門書である。本書はアメリカの大学生及び若手の研究者のために編まれたものらしいが、英米の専門家一〇人による各分野のコンパクトな指針は、我國の西洋中世史研究者にとっても参考となる点が多いと思われる。

本書の章別は次のとおりである。一 ラテン古文字学、二 古文書学、三 古銭学、四 プロソポグラフィ、五 中世社会の統計的文書のコンピュータによる分析、六 中世年代学—理論と実際—、七 中世英文学、八 中世ラテン哲学、九 中世美術の伝統と革新、一〇 中世音楽展望。

第一、第二章では古文書学の手引きとして書体、文書の形式などの説明がなされ、中世記述史料を読むための基礎知識が与えられる。第三章では、史料としての貨幣の存在形態、また貨幣についてふれた記述史料の説明があったのち、古銭学の課題と方法が、貨幣の鑄造年代・場所、重量、品位、鑄造数、流通などの面から明らかにされる。章末では歴史学の補助科学としての古銭学

について述べられる。続く二つの章は近年の研究動向をふまえたもので、第四章ではプロソポグラフィ研究、系図学について、用いる史料とその処理方法、またプロソポグラフィ研究のもつ意義などが述べられている。第五章ではコンピュータのいわゆるハードウェアに関する簡単な説明ののち、対象によるコンピュータ利用の当否判定の基準が示され、最後にソフトウェアプログラミングとデータ処理結果についても極めて簡単な案内がある。第六章は年代決定の基準となるいくつかの項目について説明している。原史料の日付の解読のための手引きである。第七—一〇章は文化史のそれぞれの分野について、主として書誌学的に道案内を試みたものであり、同時に現代における研究水準が示されている。各章の末尾には参考文献が詳しく挙げられており、大変便利である。

ここに挙げられた、古文書学、古銭学、系譜学、コンピュータ統計学、年代学などについて専門家たることは歴史研究者には困難であり、また日本における西洋史研究者たる我々は必ずしもこれらの専門家たる必要はないだろう。しかしこれらの補助科学が中世史研究に提供する成果を正しく理

解・撰取するためにも、それらの方法論を一応知っておくべきであろう。この意味で本書は西洋中世史研究者にとって有益であり、また補助科学の範囲をコンピュータにまで広げた、プラグマティックなアメリカの歴史学研究入門書としても、一読に値すると思われる。

(三八九頁 一九七六年 New York, Syracuse University Press)

(井上浩一 大阪市立大学文学部助手)

リモジョン・ド・サン＝ディディエ著
有田忠郎訳

『沈黙の書・ヘルメス学の勝利』

「象徴とは……暗黙の書法体系なのである。文字を知らぬ人間にとって一切の書物は沈黙している。……したがって『沈黙の書』といえども一般の書物と同じで、解読の鍵さえあればきれいに読み解くことができる……。』

一六七七年、ラ・ロシュエルで出版された十五葉の図版のみからなる『沈黙の書』*Mimus Liber* (作者不詳) を書物とよびう